経営・中村ゼミ 吉野チーム

販促コンペで入賞

経営学部・中村世名ゼミの吉野チームが、第18回販促会議企画コンペティション（販促コンペ、宣伝会議主催）で協賛企業賞を受賞した。販促コンペでの中村ゼミからの入賞は2年連続。

販促コンペは、協賛企業の商品・サービスのプロモーションに関する課題に対し、解決案を企画書形式で提案するコンテスト。広告クリエイターやプランナーの登竜門として知られ、今回は11社の課題に対して4389点の応募があった。

メンバーは吉野響さん、井上蒼彩さん、畑澤芽音さん（いずれも3年次）。ゼブラの「『サラサ』ブランドシリーズをもっと知ってもらい、購入につなげるアイデア」というお題に挑戦した。

3人が出したアイデアは、サラサの替え芯に「あたり」を入れ、当たり芯を店頭に持参すると別のサラサシリーズを割引価格で購入できる仕組み。これにより、ユーザーが今使用しているのと違うシリーズを試すきっかけを作り、ブランド全体の利用拡大を目指す企画となっている。


販促コンペで入賞した井上さん、吉野さん、畑澤さん（左から）

吉野さんは「ゼロから1を生み出すのは苦手だったが、3人で話し合うことで次々とアイデアが出てきた」と話す。「身近なアイテムだからこそ、いかに斬新さを取り入れるか、頭をひねった」という畑澤さん。講評では、提案のきっかけが実体験に起因しており、店頭での販促にまで訴求している点が評価された。

井上さんは「入賞は、中村准教授や先輩の指導のおかげで感謝している。ほかの入賞者からアイデアの出し方を学ぶことができ、とても参考になった」と振り返る。

公務員試験に合格した４年次生による報告会



公務員試験講座合格者報告会

エクステンションセンターが開講する公務員試験講座で、今年度の各種公務員試験合格者による報告会が、10月10日、生田キャンパスで開催された。国家総合職、国家一般職、都庁、政令指定都市などの合格者のうち4年次生有志10人が、講座を受講する3年次生に向けて勉強のコツや試験対策などについて話した。

1回25分で、テーマ、志望先などに応じて、合格者のブースを3年次生が回る形式。それぞれの合格者は、総合的な勉強方法や苦手克服法、試験ごとの対策、併願などについて、具体的にアドバイスした。

勉強に使った参考書やノートを披露するとともに、「講座で学んだことを自分で再現できるようになることが合格に至る最短ルート」「長期休暇など時間のあるときにしっかりやり込もう」などと語りかけた。リフレッシュの仕方や、やる気が出ないときはどうしたかなど、本音の話もあり、3年次生は真剣に聞き入っていた。

千代田区キャンパスコンソ共同研究　石巻フィールド調査

「網地はるか」の生産地を訪問

千代田区の大学でつくる千代田区キャンパスコンソーシアムでは共同研究を実施しており、防災学習を柱とした大学間連携と地域間協働の推進を目的に、さまざまな活動を行っている。今年度は、各大学がそれぞれの専門知を生かし、石巻の食にフォーカスした共同研究「石食プロジェクト」に取り組んでいる。学生たちが防災を「自分ごと」として捉え、被災地の人びとに学び、生活防災の意識を高めることを目的とする活動であり、8月には宮城県石巻市でフィールド調査を行った。東日本大震災の経験に基づき防災や地域に根差した研究を続けている石巻専修大学とも連携。8月25～28日に実施したフィールド調査には、本学の学生3人と石巻専大の学生2人、本学国際コミュニケーション学部の小林貴徳教授、工藤由美講師に加え大妻女子短大の教員1人が参加。石巻市沖の網地島で栽培されているサツマイモ「網地はるか」に着目し、栽培地の様子や作業を観察、生産者から話を聞いた。

サツマイモ畑で畑の管理作業を体験




高橋さんから栽培の工程についてレクチャーを受ける学生

網地はるか生産者の高橋聖公さんに手ほどきを受けて栽培地の管理作業に挑んだ早出大祐さん（国コミュ4）と大場勇輝さん（文2）は、汗だくになりながら、生産物に込められた思いに触れた。

学生たちは今後、フィールド調査で学んだ島の歴史や文化、網地はるかの誕生の背景、栽培や加工のプロセス、生産者の人となりなどを「食のテキスト」としてまとめていく。プロジェクトでは、食のテキストが千代田区キャンパスコンソーシアムの他大学の学生による「レシピ班」にバトンタッチされ、網地はるかを活用した防災食が考案されていく計画だ。

参加した小川苺南さん（国コミュ1）は、「網地はるかについて、実際に生産者の方からお話を伺い、どれほどの想いと労力が込められているのかを肌で感じることができた。また、震災遺構に足を運び、被災された方々からお話を伺ったことで、震災や防災について、より〝自分ごと〟として考えるきっかけになった。今後は、フィールド調査で実際に経験したことを大切にしながら、網地はるかの魅力を次につなげていくための食のテキストを作成したい」と話している。

寄稿

文学部ジャーナリズム学科２年
三角 羽音　山田 温奈

韓国で感じたスポーツと文化

今回「スポーツ文化の国際比較研究」という授業を通して、9月に4日間、韓国を訪れた。現地では、延世大学でのサッカー部との交流や、サッカー観戦やMBC放送局への訪問をはじめ、食事や街の様子など、さまざまな場面で日本との違いを感じることができた。


延世大学サッカー部と

延世大学でのサッカー観戦では、監督やコーチだけでなく、キーパーコーチやトレーナー、分析担当など、多くのスタッフが選手を支えていることが印象に残った。また、選手がGPSを身につけて動きを記録するなど、データを活用したサポートも行われていた。さらに、韓国では大学のサッカー部とプロチームの両立ができず、大学在学中にプロからスカウトされた場合は大学を退学する必要があると知った。日本では大学に在籍しながらプロチームで活動できる仕組みがあり、大学サッカーとプロの関わり方にも違いがあることが分かった。


街中にあるスポーツ関連の展示を見学する学生たち

MBC放送局では、撮影や取材、放送をする人がいることで、スポーツが多くの人に届けられていることを学ぶことができた。

食文化や街の風景なども印象に残った。

今回の研修を通して、韓国は日本と近い国でありながら、スポーツや食、街の様子など、実際に訪れてみなければ分からない違いが多くあることを知った。

現地で見て、聞いて、体験したからこそ得られた発見が多く、韓国の文化を身近に感じることができた4日間だった。